

# 史料報

第 61 号  
平成 6 年 9 月

## 検地帳所持争論と近世村落

### 越後地方の事例紹介

富善 一 敏

(日本学術振興  
会特別研究員)

はじめに

日本近世の村落では、一八世紀後半以降、村方文書の引き継ぎをめぐる争論が多数発生しているが(拙稿「近世村落における文書引継争論と文書引継・管理規定について」『歴史科学と教育』一二号、一九九三年)、中でも特に問題となるのが検地帳である。小稿では、嘉永五年(一八五二)越後国頸城郡行野村で起きた検地帳の所持をめぐる争論を紹介し、近世村落とそこで生活を営む百姓にとって検地帳がいかなる意味をもっていたかについて考えてみたい。

一 行野村と庄屋又右衛門家

行野村は新潟県東頸城郡安塚町にあり、小黒川の支流行野川の上流に

位置する山がちの村である。近世期には越後国頸城郡五十公郷に属し、支配ははじめ高田藩領、天和元年(一六八一)以降は幕領であり、川浦代官所の支配下にあった。村高は慶長二年(一五九七)二八・九三八石であり、天和三年の総検地では三

四・九〇三石と微増にとどまるが、安永九年(一七八〇)の新田検地で高三三・三六三石を加えるなど田地を増加させ、嘉永四年(一八五二)には六九・一八八石となっている(『安塚町誌』)。家軒・人数は、天保一二年(一八四一)の村明細帳では家数八六軒(内高持七七・無高九)、人数五九九人(内男三〇一・女二八七・僧三・禪門三・尼四・座頭一)であった(国立史料館所蔵横尾家文

検地帳所持争論と近世村落―越後地方の事例紹介―	富善 一敏	(1)
雑感	高木 俊輔	(4)
史料の修復について	高木 俊輔	(15)
文部省科学研究費補助金による研究成果報告		(6)
目次		
錦絵(彩色史料)の複製について		(8)
越後国頸城郡岩手村佐藤家文書目録刊行を終えて	安藤 正人	(8)
受贈図書		(9)
兼報		(15)

書36A-3、以下「史」3の如く略す。

### 二 争論の展開

次に庄屋又右衛門家について述べよう。当家は近世期には代々又右衛門を名乗り、検地の度ごとに案内を行い、庄屋を勤めた旧家である。近世中期以降村内外を問わず広範に質地を集積し、小作経営を展開する豪農であった。その所持高は、弘化四年(一八四七)には三八・〇三五石と村高の過半を占めているが(『未五人組小前高附帳』明治大学刑事博物館所蔵越後国頸城郡文書36-10-40)、それにとどまらないことは、天保一三年近村の小黒村からの小作米収入一三七俵余を同村の又兵衛に預けていること(『相渡申小作米積預り証文之事』「史」58)、文久元年(一八六一)七月には米価高騰による他所穀留の際今町(現直江津)の川端町幸吉方へ米三〇〇俵の輸送を代官所に願っていること(『乍恐以書付奉願上候』「史」40)などから明らかであろう。

ここでは、嘉永五年に庄屋又右衛門と同役市郎右衛門との間に起きた検地帳所持争論について検討したい。なおここで使用する史料は特に断らない限り、嘉永五年正月「役継故障出訴御用留」・同年九月「役附書類取遣一件諸用留」(春原源太郎氏収集史料、青木虹二編「編年百姓一揆史料集成」第一七卷、五二五―三八頁)である。

まず、本争論の前段をなす庄屋役引継争論について簡単に述べておく。嘉永四年一月又右衛門が庄屋勤役中に病死した。その子の弥吉が又右衛門に改名し跡役を継ごうとしたが、輪番庄屋の三郎右衛門・市郎右衛門及び百姓新助ほか四名を惣代とする三五名は役継願書への調印を拒否した。

弥吉はこれに対し、同五年三月二七日川浦代官所に三五名の不法を訴え、自分が庄屋跡役たることの承認

を願った。又右衛門から市郎右衛門への庄屋役の交代時期が又右衛門病死の先か後のいずれかが争点となっている。代官所役人の姿勢が又右衛門寄りであったためか、四月一日に又右衛門が当年六月まで庄屋役を勤め、七月に市郎右衛門へ渡し、以後三名の輪番で庄屋役を勤めること、非番中又右衛門は休番庄屋の肩書で願書等に連印することで双方内済した。

さて本題の検地帳所持争論である。この年七月内済通り又右衛門から市郎右衛門への庄屋役の引き継ぎが行われたが、その翌月市郎右衛門が役附の諸帳面と検地帳の引き渡しを申し入れてきた。しかし又右衛門は検地帳については「子細有之近年附廻り不申」とこれを拒否した。十月四日市郎右衛門は再び諸帳面の引き渡しを求め、特に検地帳に関しては「御水帳無之候てハ不受取」「先々々附廻り二候間一同受取可申」と強硬であったが、又右衛門は「私親父之存命中ニ幾度も交代致候得共御水帳ハ取引不仕候」と再度これを拒否している。その後市郎右衛門は村方三役を通して検地帳の引き渡しを再三求めたが又右衛門は承知せず、市郎右衛門は又右衛門を川浦代官所に

訴した。又右衛門の主張は次の史料に端的に示されている。

(前略) 中沢申二ハ(中略)如何之<sup>勘十郎</sup>誤<sup>勘十郎</sup>にて帳面不渡哉と御尋ニ付、勘答<sup>勘十郎</sup>ヲ諸帳面不渡と申儀ニ無之、村方仕来之帳面ハ相渡候へ共、御水帳ハ子細有之相對にてハ不被渡と、夫ハ如何之子細と申ニ、先年ハ附廻り二いたし候へ共、拾四五年来ハ又右衛門土藏ニ預置候、其誤ハ三郎右衛門親次右衛門庄屋役相勤十五六年以前死去いたし、其子三郎右衛門ハ江戸縮仕候ニ付、当番之時ハ又右衛門へ頼老ケ年相勤、夫々後ハ一郎右衛門ニ計り相頼申候、三郎右衛門ハ分家之事、殊ニ庄屋役も不相勤、一郎右衛門ハ近來之庄屋、其上葛屋土藏も廉藏にて火之用心も不束ニ付、三人相談店上にて先又右衛門并一郎右衛門親七郎右衛門・当三郎右衛門得心之上、又右衛門土藏ハ成丈<sup>成丈</sup>ニ付入用之節ハ何時ニても拝見いたし、又々又右衛門土藏ニ預ケ置候ハ丈夫ニ候間、預置可申談合にて預置候、然れハ親又衛門之取極置候を、子之代ニ出して渡せハ親之前へ申訳無之候間、容易ニ相渡不申候、併御用之差支ニハ不仕候と申候へハ、中沢御尤之事ニ候、然らハ帳面受取渡し之時

御水帳ハ又右衛門方ニ儲預り申候、御用之時ハ何時ニても差出し可申趣相認、一郎右衛門方ニても引渡し之節ハ御水帳ハ又右衛門方ニ有之候間、外之書類丈ケ相記シ可申約束にて内熟如何ニと被申候間、勘答夫にて宜敷御座候と申(後略)

代官所役人の中沢の尋問に対する

又右衛門親類勘十郎の返答である。検地帳は以前は庄屋の附廻りであったが、十四五年以来又右衛門が自家の土藏に預かつてきた。その理由は他の輪番庄屋の三郎右衛門は又右衛門の分家であり、「江戸縮」(江戸への縮布の行商力)のために庄屋役を勤められず、また市郎右衛門は「近來之庄屋」すなわち最近庄屋役を勤めるようになった家柄であり、その上土藏も簡便であり火の用心もおほつかない。そのため当時の庄屋三人で相談し、又右衛門家の土藏に検地帳を保管し、必要の際にはそこから出して「拝見」することを取り決めた。親の又右衛門の代のこの取り決めに子の自分が勝手に変更するのは親に対し申し訳ない、という内容である。

検地帳が以前は庄屋役の附廻りであったことは、宝曆三年(一七五

三)・天保七年(一八三六)・同一二年の村明細帳(「史」1-3)の検地帳に関する部分がいずれも、「是者当村庄屋相勤候者古来より預り置申候」すなわち庄屋役を勤める者が検地帳を預かると記載されていることから明瞭である。それが火の用心のために丈夫な土藏が必要という文書保存上の理由により、又右衛門家に検地帳が固定して保持されるようになったわけであるが、ここでは「分家」や「近來」の庄屋に検地帳を預けるのは不都合だという意識が存在したことに注目したい。庄屋役を勤める者は他の文書は保持しているが、検地帳は村内の本家かつ旧家の庄屋が独占的に保持すべきという、検地帳に対する百姓独自の觀念が存在したと考えられよう。もちろん又右衛門家がこうした觀念を主張した背後には、前節で述べたように、当該期における村内の他家に対する経済力の圧倒的優位があることはいうまでもない(ちなみに相手市郎右衛門の所持高は弘化四年一・四九一三石にすぎない)。

その後、本争論は川浦代官所の下で争われた。市郎右衛門は天保一二年と一四年に庄屋役を先代の又右衛門から引き継いだ際の役附文書の受

取を証拠として提出した。それには

又右衛門の直筆で検地帳が記載されており、十四年来検地帳を自家で独占的に預かつてきたという又右衛門の主張とは対立するものであったが、又右衛門側は、その年は越後国一円の立毛御見分のため検地帳が必要であったので渡したと弁明している。代官所の姿勢は、「何も御検地帳無之候ても御用差支と申二ハ有之間敷、割賦目録さへ有之候へは御年貢取立ニ差支ハ有間敷と被仰渡候」

「十余年来又右衛門ニ預ケ置候、御用之節ハ何時ても相渡と申せば夫にてよいでない歟、夫を強て受取と申せは却て村内混雑之基と云ものと仰二」などの言に示されるように、現在の又右衛門家による検地帳保持を追認し、検地帳が庄屋市郎右衛門の手元になくても年貢徴収の実務に支障はないと、又右衛門を支持するものであった。また村内の小前百姓は、その過半の五三名が「外之書類ハ如何成共御水帳之儀ハ決て御渡し不被成様ニ頼入候」と又右衛門を支持している。

いる。

### 乍恐以書付奉願上候

当御支配所頸城郡行野村庄屋市郎右衛門又右衛門へ相掛り候は、庄屋役之儀三郎右衛門・市郎右衛門三人格番務にて、交代之節ハ御検地帳・御割附・皆済目録其外書類当番之者方へ受取役義相動来候処、当七月中右又右衛門市郎右衛門方へ当番引受候二付、先例之通右書類又右衛門へ引渡候様懸合候得共申紛居相渡不申、当暮御年貢方割合ニも差懸り候二付、先例之通書類相渡し候様被仰付度旨奉願上候処、則又右衛門御呼出御糾御座候処、御検地帳之儀ハ拾余ケ年此方度々交代も有之候へ共其儘預り置来候処、今般取出し候杯と申候は難心得、尤御年貢割附・皆済目録其外書類之儀は是迄之通引渡旨申之争候処、厚御理解難黙止、兩宿申談、御検地帳之義ハ是迄之通又右衛門へ預ケ置、御用・村用にて当番へ相渡候節ハ三役印之預り書差出、村役人立会御用済次第又候又右衛門へ預り置、差支不相成様可致、外書類之儀は老品限り目録相認、以来役附書類之儀二付申争無之様、一同納得之上早々取渡いたし付送可申極にて双方納得仕候は、偏御威光之

御儀と難有仕合奉存候、然上は右一件二付毛頭願筋無御座候間、先般市郎右衛門差上候願書御下被成下置度、連印書付を以奉願上候、以上  
嘉永五子年十一月

### 当御支配所

### 頸城郡行野村

庄屋 市郎右衛門

休番庄屋 又右衛門

### 須川村庄屋

差添 勘十郎

### 川浦村

御宿 浜兵衛

同 佐助

### 川浦 御役所

前書之通御願下いたし候二付写し為取替置申候、以上  
右五人連印

争点となつた検地帳は従来通り又右衛門家が預かり、入用の際には村方三役連印の預り証文を又右衛門に差し出した上で当番庄屋に検地帳を渡すこと、他の庄屋附送りの文書に關しては一点毎に目録を作成することとが取り決められている。こうして又右衛門家は、村内における検地帳の独占的保持について、領主の公認を得たのである。さきにふれた天保

一二年の村明細帳のうち、検地帳に關する記載の部分に、「御水帳六冊共庄屋又右衛門方二預り置申極二候」との朱書が追記されていることは、これを端的に示すものである。

### おわりに

以上、越後地方の一村を事例に、検地帳の所持をめぐる争論を紹介し、検地帳をめぐる百姓の意識について検討してきた。ここから検地帳を所持することは、その村で本家かつ旧家であることを象徴的に示すと百姓にとつて意識されていたのではなからうか。だからこそ、検地帳は他の文書と異なる特別の扱いを受け、現代に至るまで大切に保存されてきたのである。

近世の文書保存・管理のあり方について、現代の文書館の源流として評価する見方もあるが（たとえば大藤修「史料と記録史料学」、記録と史料」二号、一九九〇年）、まずもつて近世社会が固有にもつ価値観の下でそれがなされた意味を考えるべきではないか。小稿がわずかながらでもそれに資することができれば幸いである。

## 雑感

高木俊輔

私は、平成六年四月一日付で史料館へ赴任したが、これは昨年八月一日付で史料館長職が復活し、森安彦氏が史料館長に就任されたことにより、空席となった第一史料室長へとお誘いがあり、二十年間勤めた信州大学人文学部を辞して上京することになったからである。四月一日の辞令交付に始まり、史料館の年度計画の一環に組みこまれてすでに四か月を経過したが、七月には「史料管理学研修会」への出席のため、予想だにもしなかつた猛暑の中を、品川区戸越の一角へと通いつめてきた。

今までの、ある程度時間のやりくりができる大学教官としての日々と、半ば事務官的要素を消化しなければならぬ史料館的日々、との間のリズムのちがいに戸惑いながら、予想以上に多い仕事量を前にした生活が続いている。この度の異動に際してご迷惑をおかけした各位に、まずお礼とお詫びを申し上げたい。

ところで、日本史学の研究を志し

て三十年以上を経ていても、この間研究テーマの側から史料の探求に努めてきただけであつて、史料そのものが抱えている問題にまともに取り組んできた訳ではないので、この機会に改めて見直してみたい、という動機が史料館勤務という形をとった一つの理由である。その史料館の行なう諸業務については、まだ一方的に学習している段階であり、館報に報告するようなことは何もないので、ここでは私の研究ともっとも密接なかわりをもってきた史料Ⅱ豪農古橋家文書について、研究者と史料という面から若干記しておきたい。

愛知県北設楽郡稲武町大字稲橋字タヒラの名望家古橋家については、戦前は修身の教科書などに天下の篤農や老農として載っていたが、一九六〇年代以降は、芳賀登氏をはじめとする古橋家文書研究会の共同研究グループの諸氏の著書・論文などで研究者間に知られるようになった。同文書の調査は、伊那谷国学研究に打ちこんできた芳賀登氏が、改めて三河に入り、それまで非公開であつた財団法人古橋会所蔵の膨大な文書の調査・研究を依頼され、共同研究を意図して始められた。たまたま同氏が東京教育大学日本史学教室で非

常勤講師として展開された国学史の受講生であつた私は、調査へのお誘いを受け、昭和三十六年八月の第一回から参加することになった。その後毎年八月中旬になると、きまつて愛知県の山中にある稲武町に出かけ、ほぼ十人規模となつた古橋家文書研究会の一員として調査に加わり、回数としては今度で三十四回目を数える。このように長期に調査が維持されているのは、史料が膨大に所蔵されているというだけでなく、古橋会という史料所蔵者と芳賀氏の調査方針との原則的な一致があつたからで、研究会の調査は財団法人古橋会の事業の一部に位置付けられ、その宿泊・調査に多大な便宜を図っていた

だけのことになった。

同研究会の調査は、まず粗分類をして目録を作り、主要な史料とともにガリ版に起こし、当初から地域の人びとに報告会を持ったり、町史や学校史など地域の事業に協力した。そのうちに古橋家からも、門外不出としていた史料が出されるようになり、新しく出てきた史料もあり、調査を重ねるうちに当初の目録では全く不十分なものになつてしまつた。とはいへ、その整理にだけ集中する訳にはいかず、文書の内容分析を推

進する必要がある、グループでは担当分野を決め、解読・筆記の作業を精力的にすすめる、その筆記分は共同研究者には全員にコピーして配布してきている。

調査十年を記念して芳賀登氏が『明治維新の精神構造』（昭和四六）を出し、二十年の一応のまとめとして芳賀登編『豪農古橋家の研究』（昭和五四年、ともに雄山閣出版刊）が出された。私は、赤報隊と偽官軍事件を中心とした草莽志士研究から出発したが、この調査には赤報隊士でのちに古橋家の援助を受けた神道三郎即佐藤清臣研究の意味があつた。私自身は、調査に参加しているうちに、次第に六代当主古橋暉克の書いた日記・メモ・書簡類に主たる関心が移り、その解読を通じて「ええじやないか」研究、農民日記研究へとつながり、さらに最近では共同研究の仲間の協力を得て、宗門人別帳の悉皆調査・筆記をして、家族カード的整理を行ない、今後の研究方向を模索しつつある。

このように私の研究は古橋家文書との関わりが強いが、この経験は今後どのように生きていくのであろうか。史料館の仕事の中で考えていきたい一つの点である。

# 史料の修復について

## — 湿害等により板状になった場合 —

青木 睦

史料館では、これまで史料の修復よりも、中性紙封筒・帙・箱などの保存容器に収納して現状の維持保存、劣化の予防措置を講じることを第一に実施してきた。修復は、史料そのものに手を加えて原形を変え、多くの時間と費用を要する作業であって、史料保存対策の最終手段である、というのが史料館の姿勢である。

しかし、すでに損傷を受けた史料に対しては、防護処置だけでは利用可能な状態を保持できない。そこで保存容器への収納作業の際、破損・劣化している史料の症状について、一点ごとに「史料状態記録」を作成し、欠落部分が失われる恐れのある箇所のみ部分的に館内で修復作業も行ってきた。

史料館の近世史料の劣化要因は、①湿害（冠水や湿気によって密着して開けられない板状のもの）②虫損（シバンムシ類による喰害にあって脆く崩れたりしたもの）③フケヘカビ類によって柔らかく脆くなり剥落をおこしたり、変色したもの④破損

（破れたり切れたりしているもの）

⑤汚損（泥・塵や水漏れにより黒・茶褐色に汚染したもの）⑥剥離（冊子の綴や巻子の表装崩れと紙継ぎが離れバラバラになっているもの）⑦酸性化（染料や明礬により脆くポロポロになったもの）の7種類に大別される。著しく状態が脆くなっているものは、一種類だけではなく、数種類の被害が複合している。

このうち湿害と虫損による被害のひどい史料は、開くことができず、閲覧停止の処置をやむなく講じてきた。史料の保存・利用のため、劣化した史料のリストをもとに計画的に修復を行い、できるだけ早期に閲覧条件の改善を図りたいと考えてきた。平成五年度に修復予算が得られたので、まず、開くことのできない板状の史料から修復を施すこととした。

今回の修復史料は、京都徳大寺家文書の内の日記類八冊、弘前津軽家文書の内四冊（津軽藩諸法令「御用格」の計二冊（一一二〇紙））である。史料館所蔵史料の内、修復が

必要な対象は、これまでの記録の統計から全収蔵量の約三％（一万五千点）以上と類推される。しかし、今回の実施範囲が湿害史料のすべてではないし、虫損史料にいたっては未着手である。

これらの史料の修復によって、一丁ごとにめくれるようにし、紙の厚みも変えずに原形を生かして閲覧可能にすることを目指した。

次に、四つの保存修復の基本的原則にしたがって修復方法と技術の評価、材料の選定を行った。その基本的原則とは、①原形保存—劣化程度にあった必要最小限の修復で、できるだけ原形を残すこと②安全性—史料への影響が少なく、非破壊的で長期的に安定していること③可逆性—史料を処置前の状態に戻せること④記録—やむをえず原形を変更する場合は、元の状態がわかるよう克明な記録をとる、ということである。

具体的な修復方法は、必要最小限の部分補修（虫損直し、繕い）に止めることとし、閲覧に際しての反復利用に耐えられる場合は総裏打ちをせず、数百におよぶピンポイント状の虫穴の繕いも見送ることにした。虫損の集中箇所の処置は、周辺部分や全体とのバランスが崩れないよう

考慮して修復にあたることとした。そのため、高度な技術と技法および慎重かつ精密な作業が要求されると判断し、専門家に委託することとした。専門家を選択するにあたり、史料館としての修復後の望ましい状態と修復方針を呈示し、冊子の密着部分への湿りの与え方と剥離作業、本紙欠損部の補修、装丁綴直しなど、技術や材料、記録方法について両者と協議した上で、修復仕様書と見積をとり、選定の手続きをとった。

依頼先が決定後、詳細な打ち合わせを行った。その内容は、冊子解体に際して綴部分に書込情報が残されている場合の処置、綴糸の処置と結び方の記録、冊子小口の墨書を残す処置、正確な現状記録のための写真撮影と記録の作成、打ち合わせにない問題についての対応などである。疑問点があった場合には両者が協議の上、措置を決定することとした。修復作業において、解体前は一冊であったが、本来は二冊で後に合冊されていたことが判明した例があり、他にも修復によって史料学的な貴重な情報が得られている。今後ともできるだけ早期に修復を行い、史料の万全な保存と利用に努める所存である。

# 文部省科学研究費補助金による

## 研究成果報告

山田 哲好

本稿は、平成二年度から五年度までの四カ年連続で、研究課題「史料所在情報の集約とその解析的研究」について、文部省科学研究費補助金一般研究(A)の交付を受け、調査・研究を実施した成果についての概要を報告するものである(なお、詳細については「平成五年度科学研究費補助金(一般研究A)研究成果報告書【課題番号〇二四〇一〇〇七】A4判三四八頁)を参照されたい)。

本研究スタッフは、森安彦史料館長が代表となり、当館員と情報処理専門の神戸商科大学情報処理教育センター周防節雄教授で組織し、大量データ入力のための前・後処理には、多数の大学の院生・学部生・OBの方々のご協力を得た。以上の関係各位に対し深甚なる謝意を表する次第である。四カ年の補助金交付総額は二、七〇〇万円で、各年度別配分額は、平成二年度一、〇〇〇万円、同三年度五〇〇万円、同四年度四〇〇万円、同五年度八〇〇万円である。そこで本研究は、これまでの成果

を踏まえて、①史料所在情報の内容分析を行って同一出所史料群の集約や史料群そのものの所在分布、さらには旧階層・職業別の史料群の分布状況の把握を行い、②同時に最新情報の補充調査・収集等を行い、史料所在情報の精度を高め、全国的レベルで史料所在情報のデータベース化を行うおとするものである。なお、本研究で用いた機器は全てパソコン(七台)で、各本体には内部用、あるいは外付用ハードディスクやMO(光磁気ディスク、一枚で容量が一・二八MB)を増設している。

データベースは、一史料(文書)群ごとの所在とその概要についてのデータで、いかなる情報をいかに入力するかが最大の課題となる。そこで、研究者や史料保存利用機関との合同研究会を二回開催(平成三年一月・同五年二月)し、さらに館内研究会での検討を経て、「史料所在データシート」(以下、「シート」と略、A4判両面)を作成した。様々な問題点を全て解決することは困難なので、最低限不可欠な情報を網羅することにした。以下に採録する各項目及びタグを「」に示す。

まず本研究による史料所在情報の調査・収集は、史料館におけるこれまでの収集実績を考慮して、カバー率の低い地域を重点的に実施した。その結果、三三都道府県、一二九機関(含個人)に及び、収集した史料目録類を中心とする文献は、三〇三タイトル、四六〇冊にのぼった。ご協力いただいた関係諸機関・各位にお礼申し上げます。

さて、本研究で構築しようとした

「シート」識別番号：「#」  
所在地：「A1」  
所蔵者へ機関：「N1」  
出所：「N21~N2n」  
出所の現住所：「A21~A2n」  
旧地名：「P01~Pn」  
旧支配：「R01~Rn」  
旧職業・階層：「S1~Sn」  
年代 上限年代：「E1」  
          下限年代：「E2」  
          主要年代：「E3」  
数量||件数：「C」 点数：「T」  
現職業：「J1~Jn」  
所蔵関係：「W1」  
寄贈・寄託者名：「W2」

同住所：「W3」  
保存状況：「D」  
利用状況：「U」  
調査年月日：「G1」  
出典刊年：「G2」  
調査機関：「G3」  
調査者：「G4」  
出典：「Q1~Qn」  
出典請求記号：「J1~Jn」  
関係地：「A31」  
内容：「X」  
\*項目の続き：「-」

次にファイル作成手順について記す。まず記入済みの「シート」を専門の入力業者に委託して、入力マニュアルに従ってMS-DOSのテキストファイルを作成し、「BASE IV」というデータベース管理システムに取り込み、データの追加・更新システムや検索システムを作成してデータベース・システムを構築している。具体的には、上限・下限・主年代、出所、出所の現地名・旧地名、支配関係、旧階層・職業、内容、出典名「シート」識別番号等で検索可能である。ちなみに、本研究プロジェクトを含めて、これまで入力を終えた「シート」は、合計三二、四七四件である。

今回、最終報告書作成のために対象としたデータは、入力済データの内で精度が高い神奈川県分、二、八四九件に限定した。

次に検索及び解析結果の一部について述べる。まず出所については、同一史料群に複数の「シート」が存在する場合が多い。その理由は、

①同一機関が数度にわたり調査を行っていたり、異なる機関がそれぞれに調査を実施したために、出典となる目録類が複数存在し、それぞれに「シート」を作成している場合、  
②個人蔵の史料の一部を史料保存利用機関等へ寄託・寄贈され、現収蔵者（機関）が複数存在する場合、である。

検索の結果、同一史料群に対し複数の「シート」が存在する比率は以下の通りであった。

- 二枚（二三四件 計四六八枚）
- 三枚（七二件 計二六枚）
- 四枚（二三件 計九二枚）
- 五枚（一一件 計五五枚）
- 六枚（二件 計一二枚）
- 七枚（四件 計二八枚）
- 九枚（一件 計九枚）

上記の結果から、一枚の「シート」は一、九六九枚で、それ以上記重複の三四七件を加えた二、三一六件が

実質的な所在件数である。実質所在件数に対して、複数の「シート」が存在する割合は、一五%である。また、複数の「シート」は、二〜三枚が圧倒的に多く、八八%を占める。

以上のように、出所と所蔵者で検索が可能となれば、同一出所の史料群を集約できる。これからは、同一出所の集約や様々な変更に伴う最新情報を提供するのための修正に、本システムが十分機能することが確認できた。今後の課題として、同一出所で複数の「シート」が存在する場合、その全体を集約したデータとして提供することが必要であるが、その際にも個々の時点での固有データを明示することが不可欠となる。集約方法やデータそのものの記述及び入力方法、さらにはデータベース上での処理方法については、さらに検討をしなければならぬ。

次に旧支配についての検索結果であるが、出典となる目録類に明記されていないと「シート」記入時点で相当な労力を要するし、とりわけ相給知行の場合、特定領主の確定ができないことが多く、データは「相給」として処理することにした。その結果、「相給」の出現頻度は六二九件であった。しかし、この「相給」と

いう表記には、直轄領と旗本領、直轄領と藩領など所領構成も様々であることから、その構成を記号化して表記することも一案であろう。今後の課題としたい。このように、旧支配についての情報が全国的な規模で完備されると、個々の領分の所在分布が把握できるなど利用価値が高い。

旧階層・職業については、出典の目録に明記されている場合に限ってのみ、そのまま採録することを基本としたが、同義語でも様々な表記がある中で、一部統一表記をした（例：藩主と大名は後者、藩士と家中は前者にそれぞれ統一等）。その他については、いかなる表記があるのか、その具体的なデータを把握するための意図もあつて検索を行った。その結果、商業活動に関わる表記に多様性が顕著である。例として、商家、商人、商業や単に問屋だけであつたり、具体的に廻船問屋、干鰯問屋、薬種問屋といった表記もある。今回は神奈川県分という限られたデータであるが、全国的レベルでの検索を行うことにより、同義語の多様性や地域性が明らかになるし、それらを検討すれば、同義語、上位語、関連語などが定義でき、検索のためのシソーラスが可能となろう。

最後に、いくつかの問題点と課題について述べてみたい。

第一には、当該史料群の利用状況データの充実である。自治体史や逐次刊行物、研究書などに引用されている情報の追加である。とりわけ優先したいのは、資料集などとして翻刻されている情報である。

第二は、個々の史料群の追跡調査である。具体的には収蔵者名や住居表示の変更、史料群の移動（転居や寄贈・寄託）について最新情報をいかに把握するかという問題である。今後データが益々増加することを考えても史料館独自では到底全国をカバーしきれぬものではない。したがって全国の史料保存利用機関及び研究者との情報交換を定期的に行う体制づくりが緊急の課題である。

第三は、平成六年度から国文学研究資料館の大型計算機に参入が可能となり、これまでの蓄積を生かしながら本格的なシステム開発に向けてスタートすることになるが、公開体制そのものの検討（提供方法を含めて）と、その早期確立が大きな課題である。

今後関係諸機関ならびに各位に對し、ご理解とご協力をお願いする次第である。

## 錦絵（彩色史料）の複製について

山田 哲好

史料館には錦絵をはじめ、絵巻、絵図等の彩色史料が相当量あり、近年絵画史料が見直されている傾向を反映して、利用頻度が高くなっていく。また閲覧だけでなく、出版物に掲載するための撮影頻度も高くなっていく。このような状況では、原本の退色、劣化損傷が危惧されるため、これまでも様々な対応を行ってきた。その経緯は、まず絵巻や錦絵の内、特に利用頻度の高いものについて、カラーフィルム（四×五、六×七サイズ）による撮影を行い、それをプリントしてアルバム形式で利用に供し、一方で出版物への掲載にはそのフィルムを貸し出す方法を採用してきた。しかし、フィルムそのものの退色、劣化の問題があり（もちろんフィルムの保存環境とも関連するが）、長期間に及んで需要に耐えることが困難である。

そこで、今回の錦絵の複製には、平成元年度から大型絵図（一辺二メートル以上）の複製化（『大型絵図の複製について』本誌第五三号参照）を実施した際に採用したダイレクトプリント方式（レンズを通して直接感材に写し出す方法）で行った。その理由は、プリントの保存年限、解像力、分割枚数、利便性の諸点で利点が認められたからである。用いた感材は旧チバクロームを引き継いだイルフォードアネテック社のもので、イルフォードクロムクラッシュシリーズの三種の感材を同一条件でテスト撮影し、原本に最も色調に近いCPH1Mを採用し、原寸大で撮影した。最大でB0判までプリント可能なので、続絵も五枚まで分割なしでプリントできる。さらに長期保存のために両面ラミネート加工（熱処理を施さないコールドタイプ、無反射の梨地）を施した。保存はポリプロピレンの透明の袋（特注）に入れ、マップケースに収納している。

今回は予算の関係で全体の三分の二に当たる約四五〇件、約六〇〇枚の複製を作成したが、残部についてもできるだけ早期に対処する計画である。撮影に際し、技術的な点でご協力いただいた関係諸氏にお礼申し上げる次第である。

## 越後国頸城郡岩手村佐藤家文書目録 刊行を終えて

安藤 正人

佐藤家文書は、越後国頸城郡岩手村（現在の新潟県中頸城郡柿崎町大字岩手）佐藤家の原蔵にかかる総数約一万二千点の文書群で、昭和二八年と昭和五七年の二次にわたって当館の所蔵に帰したものである。

昭和五八年に「史料館所蔵史料目録第三十八集」として「佐藤家文書目録（その一）」を出して以来、実に足かけ十二年もかかってしまったが、このほど「史料館所蔵史料目録第六十集」として最後の「佐藤家文書目録（その四）」を刊行し、本文書の整理と目録刊行はこれですべて終了した。

本文書のように万を越える大きな文書群の場合、まず全点の整理と目録編成を完了した上で目録を刊行するのが理想的な手順であつたらう。しかし、史料館では原則として一つの文書群は一人が担当し、ローテーションを組んで目録を刊行しているため、右のような手順をとることは実際上不可能であり、結局、文書群全体を完璧に把握しないまま、整理を終えたものから順次目録を刊行す

るという方法をとらざるをえなかった。その結果、「目録（その一）」から「目録（その四）」まで、四冊の目録には相互に同種史料が入り交じることになってしまった。

さらに利用者にとってやっかいなことは、目録の項目編成が各冊で少しずつ異なっていることである。所収史料の内容や性格が違うことが主な理由だが、目録編成の考え方自体が、この間、急速に進歩してきたことも大いに影響している。

そこで、検索の不便を少しでも軽減するため、ひとつの試みとして、「佐藤家文書目録総合目次」なるものを作成し、今回刊行の「目録（その四）」に掲載した。

この「総合目次」は、佐藤家文書の文書群構造を総合的に見直して新たに大・中・小三レベルの項目を設定し、それに対応する目録各冊の該当項目を縦一線に並べて、四冊の目録編成の相互関係をわかりやすく示したものである。佐藤家文書を利用する際は、まず最初にこの「総合目次」を活用していただければと思う。



# 受贈図書 平成四年度 (五)

(一) 内は寄贈者名(敬称略)。ただし、省略している場合もあります。

- 群馬県史 通史編10〔群馬県〕
- 岡登用水史〔岡登堰土地改良区〕
- 草加市史 資料編Ⅲ〔草加市〕
- 上尾市史 第二卷〔上尾市〕
- 市原市史 資料集〔近世編1〕〔市原市〕
- 大田区史 中巻〔大田区〕
- 日の出町史 通史編上巻〔東京都日の出町〕
- 天徳寺寺域第3遺跡発掘調査報告書〔天徳寺寺域第3遺跡調査会〕
- 絵で見る年表 足立風土記〔足立区教育委員会〕
- 足立風土記資料 金石文1〔同右〕
- 足立風土記資料 民俗2・古文書史料集1〔同右〕
- 伊勢原市史 史料編 近世1〔伊勢原市〕
- 綾瀬市史 2〔綾瀬市〕
- 神奈川県民俗調査報告 19〔神奈川県立博物館〕
- 横浜の食文化〔横浜市教育委員会〕
- 第7回・第8回全国天領ゼミナール記録集〔新潟県金井町教育委員会〕
- 勝山市史 第三巻〔勝山市〕
- 博物館講演集〔長野市立博物館〕
- 沼津市史編さん調査報告書 第二集〔沼

- 津市教育委員会〕
- 大阪市史史料 第三十六輯〔大阪史料調査会〕
- 兵庫県史 考古資料編〔兵庫県〕
- 姫路市史 第十五巻上〔姫路市〕
- 〔宮崎県〕野尻町文化財調査報告書 第5集〔野尻町教育委員会〕
- 公文書館設置のための基礎調査 公文書館実態調査一覽表〔東京都港区総務部〕
- 喜多院日鑑 第二巻読み下し〔川越喜多院〕
- 趙東祐抗日闘争史〔榴亭趙祐先生記念事業会〕
- 岡崎商工会議所百年史〔岡崎商工会議所〕
- 広島経済大学研究双書 第10冊〔広島経済大学地域経済研究所〕
- 諸国叢書 第九輯〔成城大学民俗学研究所〕
- 歴史と民俗 9〔神奈川県立文化研究所〕
- 袋井郵便御用取扱所史料〔その1〕〔通信総合資料館〕
- 臨川寺文書について〔田中浩司〕
- 戦国期寺院領主経済の一畝〔同右〕
- 〔藩中古文書〕所収正木文書について

- 〔黒田基樹〕
- オトタチバナヒメ伝承の民俗学的考察〔入江英弥〕
- 釧路市立博物館収蔵資料目録〔Ⅱ〕
- 北海道立文書館所蔵資料目録 8
- 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録 12
- 北海道開拓記念館一括資料目録 第24集
- 埼玉県立文書館増加図書目録 昭和62、平成2年度
- 国立歴史民俗博物館蔵資料目録 一
- 旧幕引継書目録 14〔国立国会図書館図書部〕
- 多摩市史関係所在文書目録〔2〕〔多摩市史編集委員会〕
- 日本銀行所蔵貨幣資料目録〔その3〕
- 〔日本銀行金融研究所〕
- 外交史料館所蔵外務省記録目録〔戦前期〕 第1巻・第2巻〔外務省外交史料館〕
- 川中家文書目録 近代の部〔大阪府公文書館〕
- 大阪商業大学商業史研究所資料目録 第1集
- 山澤家文書目録〔東大阪市史編集委員会〕
- 堺市立中央図書館蔵与謝野晶子著書・研究書目録
- 岡山県総合文化センター郷土資料増加図書目録 平成3年度
- 新聞記事目録〔1〕、〔4〕〔徳島県協町史編集委員会〕

- 収蔵品目録 7〔福岡市博物館〕
- 福岡県公共図書館郷土資料総合目録 追録4〔福岡県立図書館〕
- 熊本研究文献目録 人文編Ⅱ〔熊本県企画開発部文化企画室〕
- 岡藩由学館典籍等目録〔竹田市立図書館〕
- 公文類聚目録 第八〔国立公文書館〕
- 内閣文庫所蔵正保城絵図 Ⅱ-14〔同右〕
- 北海道立文書館史料集 第八
- 〔北の歴史・文化交流研究事業〕中間報告〔北海道開拓記念館〕
- 北海道開拓の村整備事業のあゆみ〔同右〕
- 函館／都市の記憶 市制施行70周年写真集〔函館市史編さん室〕
- 転換期北奥藩の政治と思想―津軽藩宝暦改革の研究―〔長谷川成一〕
- 図書資料目録〔上〕・〔下〕〔郵政省郵政研究所附属資料館〕
- 新潟県上越市浄興寺史料目録〔その1〕〔上越市教育委員会〕
- 糸魚川市歴史資料館所蔵大村秋雨翁収蔵資料目録
- 富山県公文書館文書目録 歴史文書七・八
- 小山町史資料所在目録 第1・7、15集〔静岡県〕小山町〕
- 静岡岡周智郡森町所在古文書目録 第7集〔森町史編さん委員会〕
- 名古屋博物館蔵品目録 第1分冊
- 〔旧乗本村小川組古文書目録〕〔川合重雄〕

平成五年度 (一)

写真にみる気仙—明治・大正・昭和初期

—〔大船渡市立博物館〕

(岩手県) 山形村埋蔵文化財調査報告書

4〔山形村教育委員会〕

江釣子遺跡群—平成元年度・平成2年度

発掘調査報告—(岩手県) 江釣子村

教育委員会)

千厩町文化財調査報告 第7集(岩手県

千厩町教育委員会)

東北歴史資料館資料集 32、34

比内町史資料編第七集(秋田県比内町)

大館市の文化財〔大館市教育委員会〕

新庄・昔の街並み〔新庄市教育委員会〕

山形県教育史 通史編 中巻〔山形県教

育委員会〕

白河市史 第七・十巻〔白河市〕

桑折町史 第6巻(福島県) 桑折町史

刊行委員会)

二本松城址 一〔二本松市教育委員会〕

三和町史 資料編原始・古代・中世

(茨城県) 三和町)

太田市史 通史編近世(太田市)

館林双書総目次 第1巻〜第20巻(館林

市立図書館)

所沢市史 下〔所沢市〕

三郷市史 第四・八巻(三郷市)

三芳町史 民俗編(埼玉県) 三芳町)

鳩ヶ谷市の古文書 第十七・十八集(鳩

ヶ谷市)

鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書 第4・

5集(鳩ヶ谷市教育委員会)

流山市史 近世資料編Ⅲ〔流山市立博物

館〕

栄町史資料集 (一)(千葉県) 栄町役

場)

近世両総地域における物流の構造〔原直

史〕

行徳塩業と塩浜由緒書〔落合功〕

〔千葉県市町村変遷図〕〔千葉県文書館〕

区制60周年記念図説板橋区史〔板橋区〕

北区史資料編 近世1・民俗編1〔東京

都北区〕

世田谷区史料叢書 第七巻(世田谷区教

育委員会)

下野毛遺跡 Ⅱ〔同右〕

諏訪山遺跡 Ⅱ・Ⅲ〔同右〕

野毛大塚古墳 1992〔同右〕

蛇崩遺跡〔同右〕

勝光院文化財総合調査報告〔同右〕

港区区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報

告 14〔伊勢菰野藩土方家屋敷跡遺跡

発掘調査会)

武蔵野の民具と文書〔武蔵野市教育委員

会)

城山町史 1・11〔神奈川県) 城山町)

寒川町史 4〔神奈川県) 寒川町)

金井町文化財調査報告書 第8・9集

(新潟県) 金井町教育委員会)

大野市史 第7・8巻(大野市)

大井家住宅調査報告書〔武生市教育委員

会)

塩尻市誌 第三巻(塩尻市)

(長野県) 佐久町誌 (自然編)・(民

俗編)〔佐久町誌刊行会〕

佐久町の文化財〔長野県) 佐久町文化

財調査委員会)

関ヶ原町史 通史編下巻・別巻〔岐阜

県) 関ヶ原町)

岐阜県歴史資料館所蔵資料撰 (一)

名古屋博物館調査研究報告 Ⅱノ

(一)・(二)

三重県史 資料編現代1・2

史料京都の歴史 第6巻(京都市)

平等院庭園発掘調査概要報告〔宇治市教

育委員会)

新修大阪府史 第八巻(大阪府)

阪南市埋蔵文化財報告 XII、XN〔阪南市

教育委員会)

谷川瓦調査報告 I〔大阪府) 岬町教

育委員会)

相生市史 第八巻上(相生市)

和歌山市史 第10巻別巻(和歌山市)

備中吹屋一町並調査報告書〔岡山県)

成羽町教育委員会)

広島藩・朝鮮通信史来聘記〔呉市入船山

記念館)

松山市史 第一巻(松山市)

(宮崎県) 田野町文化財調査報告書 第

11、15集(田野町教育委員会)

高崎町文化財調査報告書 第3集(宮

崎県) 高崎町)

鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ三、

玉里島津家史料一〔鹿児島県)

都城市文化財調査報告書 第16、20集

〔都城市教育委員会)

御竜鑑 第五巻(秋田県立秋田図書館)

久喜市史 通史編上巻・下巻、民俗編、

自然編、史料編I、IV〔久喜市)

久喜市史調査報告書 第一、十四集

酒蔵の町新川物語高木藤七小傳・資料集

〔高木文雄)

小田原市史 史料編中世Ⅲ(小田原市)

藤井寺市史 第十巻(藤井寺市)

福岡県史 近世史料編福岡藩町方(二)、

文化史料編筑前高取焼、近代史料編林

遠里・勤農社・土族授産(福岡県)

神奈川県立文化資料館の20年〔神奈川県

立文化資料館)

北海道博物館等施設ネットワーク事業報

告 Ⅱ〔北海道開拓記念館)

正倉院文書拾遺〔国立歴史民俗博物館)

報徳博物館資料集 1

浅草寺誌 全〔金龍山浅草寺)

家傳上・下(密城朴氏齋齋公派尚中家系)

〔朴永寛)

資料高村光太郎の読書〔北斗会出版部)

私伝・吉田富三細胞はこう語った〔吉

- 田直哉)
- シリーズ祖山田顕義研究 第五集(日  
本大学)
- 続石井至毅著作集(世田谷区立郷土資料  
館)
- 統計局・統計センター百二十年史(総務  
庁統計局)
- 中央大史資料集 第十集(中央大学大  
学史編纂課)
- 凶録東海大学50年(東海大学出版会)
- 歴博フォーラム 変身する 仮面と異装  
の精神史(国立歴史民俗博物館)
- 異民族へのまなざし「古写真に刻まれた  
モンゴロイド」(東京大学総合研究資  
料館)
- 三木金物問屋史(全三本金物卸商共同組  
合・三木商工会議所)
- 鯨の郷々くじらをめぐる文化史(高知  
県立歴史民俗資料館)
- 第四十四回正倉院展目録(奈良国立博物  
館)
- 日本外交文書 昭和期Ⅰ第1部第3巻  
〔外交史料館〕
- 北海道開拓記念館研究報告 第8、12号  
新修釧路市史 第1巻(釧路市)
- 新旭川市史 第六巻(旭川市)
- 松前町史 通説編第二巻(北海道)松  
前町)
- 五所川原市史 史料編1(五所川原市)
- 青森県立郷土館調査報告 第30集
- 盛岡藩雜書 第六巻(盛岡市教育委員会)
- 氣仙沼市史 IV(氣仙沼市)
- 桃生町史 第四巻(宮城県)桃生町)
- 秋田城跡―平成三年度秋田城跡発掘調査  
概報―(秋田市教育委員会)
- 秋田城跡調査事務所研究紀要 II(同右)
- 米沢市史 第三巻(米沢市史編さん委員  
会)
- 米沢市史(編集)資料 第二十五・二十  
六号(同右)
- 寒河江市史編纂叢書 第46集(寒河江市  
教育委員会)
- 復刻明治四十三年山形県西村山郡統計書  
(同右)
- 西会津町史 第3巻(福島県)西会津  
町史刊行委員会)
- 梁川町史 4(福島県)梁川町)
- 福島市史資料叢書 第61・62輯(福島市  
教育委員会)
- 茨城県史料 近世社会経済編Ⅳ・幕末編  
Ⅲ(茨城県立歴史館)
- 茨城大学付属図書館郷土資料双書Ⅰ  
(二)(茨城大学付属図書館)
- 南河内町史 史料編4・資料集6(栃  
木県)南河内町)
- 尾島町誌 通史編上・下巻(群馬県)  
尾島町)
- 大間々町誌 別巻八(群馬県大間々町)
- 新編埼玉県史図録(埼玉県)
- 大宮市史 資料編三(大宮市)
- 与野市史別巻 井原和一日記Ⅲ(与野市)
- 春日部市史 第五巻(春日部市)
- 上尾市史 第一巻(上尾市)
- 図説浦和のあゆみ(浦和市)
- 玉川村史 通史編(埼玉県)玉川村)
- 神川町誌(埼玉県)神川町教育委員会)
- (同右)資料編(同右)
- 朝霞市史調査報告書 第六・九・十・十  
二集(朝霞市教育委員会市史編さん室)
- ふるさと伊奈―町制施行20周年記念―  
(埼玉県)伊奈町)
- 伊奈町史資料調査報告書 第一―八集  
(同右)
- 川越市史研究 第4号(川越市立図書館)
- 伊奈公と伊奈町(埼玉県)伊奈町教育  
委員会)
- 埼玉県比企郡玉川村日野原遺跡(玉川村)
- 玉川村の民俗(玉川村教育委員会)
- 玉川村埋蔵文化財調査報告書 第3、7  
集(同右)
- 玉川村史調査報告書 第一―四集(同右)
- 船橋市史 史料編三・七(船橋市)
- 習志野市史 第三巻(習志野市教育委員  
会)
- 鴨川市史 史料編(二)(鴨川市)
- 鎌ヶ谷市史 資料編V(鎌ヶ谷市教育委  
員会)
- 我孫子市史資料 近世篇Ⅱ(我孫子市教  
育委員会)
- 船橋の民家 15(船橋市教育委員会)
- 船橋市民俗文化財緊急調査報告 第2次  
―二宮地区―(船橋市教育委員会)
- 船橋市市内遺跡発掘調査報告書(同右)
- 武蔵野市史 続資料編七(武蔵野市)
- 歴史の道調査報告書 第一集(東京都教  
育委員会)
- 東京都古文書集 第十一巻(同右)
- 東京市史稿 市街編第八十四・産業篇第  
三十七(東京都公文書館)
- 多摩市史及書(4)―(8)(多摩市)
- 小平市史料集 第一巻(小平市中央図書  
館)
- 府中町青年団のあゆみ(東京都)府中  
市教育委員会)
- 武蔵国土支田村小島家文書(練馬区教育  
委員会)
- 葛飾区郷土と天文の博物館考古学調査報  
告 第3集
- 葛飾区古文書史料集 七(葛飾区郷土と  
天文の博物館)
- 文化財シリーズ 36、38(杉並区教育委  
員会)
- 杉並資料集録 寺院明細Ⅰ(同右)
- 江戸町方書上(二) 芝編上巻(東京都  
港区立みなと図書館)
- 文化財研究紀要別冊第三集・第五集(東  
京都北区教育委員会)
- 世田谷区史料叢書 第八巻(世田谷区教  
育委員会)
- 世田谷区の社寺写真集(同右)

- せたがやの文化財〔世田谷区教育委員会〕
- 世田谷区文化財調査報告集―1―〔同右〕
- 世田谷区近代火災史年表〔同右〕
- 宇奈根―世田谷区民俗調査第10次報告―〔同右〕
- 喜多見陣屋遺跡Ⅱ〔同右〕
- 世田谷区教育史 資料編六〔同右〕
- 伊勢原市史 資料編 近現代〔伊勢原市〕
- 茅ヶ崎市史 現代6 新聞集成Ⅱ〔茅ヶ崎市〕
- 藤沢山日鑑 第11巻〔藤沢市文書館〕
- 藤沢市史料集 (十七)〔同右〕
- 小田原市立図書館郷土資料集成 6
- 寒川町史調査報告書 2・3〔(神奈川県) 寒川町〕
- 横浜市文化財調査報告書 第十四輯の六・第二十三輯〔横浜市教育委員会〕
- 長岡市史 資料編2〔長岡市〕
- 十日町市史 資料編4・5〔十日町市〕
- 高岡市史料集 第一集〔高岡市立中央図書館〕
- 加能史料 南北朝1〔石川県〕
- 加賀藩御細工所の研究 (一)・(二)〔金沢美術工芸大学美術工芸研究所〕
- 福井県史 通史編1・資料編17〔福井県〕
- 鯖江市史 通史編上巻〔鯖江市〕
- 塩尻市誌 第四巻〔塩尻市〕
- 各務原市資料調査報告書 第16号〔各務原市歴史民俗資料館〕
- 静岡県史 資料編10・20・24〔静岡県〕
- 森町史 資料編三〔静岡県) 森町〕
- 新編岡崎市史 1・3・20〔岡崎市〕
- 刈谷市史 第3巻〔刈谷市〕
- 年表にみる草津のあゆみ〔草津市〕
- 宇治市埋蔵文化財発掘調査概要 第18集〔宇治市教育委員会〕
- 向日市埋蔵文化財調査報告書 第36集〔財団法人向日市埋蔵文化財センター〕
- 1・向日市教育委員会
- 大阪市史料 第三十七輯〔大阪市史料調査会〕
- 羽曳野資料叢書 4・6〔羽曳野市〕
- 和泉における綿業と堺商人〔大阪府立大学経済学部〕
- 大谷女子大学資料館報告書 第28冊
- 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成3年度〔泉佐野市教育委員会〕
- 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告 20・25・28・30〔同右〕
- 大西遺跡―旧泉佐野市立第二中学校跡地造成事業に伴う発掘調査報告書―〔同右〕
- 兵庫県史 史料編中世7〔兵庫県〕
- 豊岡市史 史料編下巻〔豊岡市〕
- 出石町史 第四巻〔(兵庫県) 出石町〕
- 開書―松山藩赤穂御預人始末―〔赤穂市〕
- 和歌山県史 近現代二〔和歌山県〕
- 吉井町史 第三巻〔(岡山県) 吉井町〕
- 岡山藩家中諸士家譜五音奇 1・3〔岡山大学文学部〕
- 阿波・歴史と民衆 Ⅱ〔徳島地方史研究会創立二〇周年記念論集刊行委員会〕
- 香川町誌〔(香川県) 香川町〕
- 松山市史 第二巻〔松山市〕
- 五藤家屋敷跡発掘調査報告書〔安芸市教育委員会〕
- 中村平左衛門日記 第十巻〔北九州市立歴史博物館〕
- 大分県先哲叢書大友宗麟資料集 第一巻・第二巻〔大分県教育庁文化課〕
- 崎南日誌 第三巻〔宮崎県立図書館〕
- 都城市文化財調査報告書 第22集〔(都城) 市教育委員会〕
- 北方町文化財報告 第3・5集〔(宮崎県) 北方町教育委員会〕
- 沖繩県史料 戦後4〔沖繩県教育委員会〕
- 色川三中の研究 学問と思想篇〔中井信彦〕
- 東久世通禧日記 下〔霞会館〕
- 西園寺公望傳 第三巻〔立命館大学〕
- 編年百姓一探究史料集成 第十七巻〔(三書房) 書房〕
- 大林組百年史 1892―1991〔株式会社大林組〕
- 〔同右〕史料編〔同右〕
- 目でみる明治生命の110年〔明治生命保険相互会社〕
- 立命館百年史資料集 第一集〔立命館大学〕
- 神奈川大学日本常民文化研究所調査報告
- 第16集
- 新収日本地震史料 続補遺〔自天平6年(至大正15年)〔東京大学地震研究所〕
- 石炭研究資料叢書 No.14〔九州大学石炭研究資料センター〕
- サントリー美術館論集 三号
- 図像蒐成 I〔仏教美術研究上野記念財団助成研究会〕
- 市立図書館図書蔵郷土資料分類目録 第10分冊
- 北海道立文書館所蔵公文書件名目録 8
- 苫小牧市博物館所蔵資料目録 7
- 秋田県歴史資料目録 第二十九集
- 行政資料目録〔秋田県総務部文書広報課 県政情報室編〕
- 〔同右〕追録Ⅰ・Ⅲ〔同右〕
- 真崎勇助翁コレクション目録〔大館市教育委員会〕
- 古文書近世資料目録 第14号〔山形大学 附属博物館〕
- 山形県史料所在目録 第8集〔山形県総務部広報課県史編さん室〕
- 諸家文書目録 IX〔鶴岡市郷土資料館〕
- 山形県立博物館収蔵資料目録 歴史資料目録Ⅰ
- 慈恩寺文書調査報告書〔山形県教育委員会〕
- 歴史資料館収蔵資料目録 第22集〔福島県文化センター〕
- 郡山市歴史資料館収蔵資料目録 第1・

6集

福島県西会津町史資料目録 第5集〔西会津町史刊行委員会〕

(福島県) 桑折町歴史資料所在目録 第1集

1・3・5・10・18〔桑折町史編纂委員会〕

史料目録 32・33〔茨城県立歴史館〕

牛久市小坂・斎藤家文書概要調査報告書〔牛久市〕

栃木県史料所在目録 第22集〔栃木県立文書館〕

館林市立図書館蔵秋元文庫漢籍分類目録

三俣町古文書目録〔群馬大学教育学部歴史学第一研究室〕

藤岡市近世・近代現代史資料所在目録〔1〕・〔3〕・〔6〕〔藤岡市史編さん室〕

幸手市史調査報告書 第5集〔幸手市教育委員会〕

川越市古文書目録〔川越市教育委員会〕

福田屋文書目録〔上福岡市教育委員会〕

福田屋文化財資料目録〔同右〕

早船屋文書目録 増補版〔同右〕

鶴ヶ島町諸家文書目録 (1)・(2)〔鶴ヶ島市〕

鶴ヶ島市諸家文書目録 (3)〔同右〕

川越市立博物館収蔵文書目録 (一)・(四)

光西寺松井家文書目録〔川越市立博物館〕

我孫子市史資料目録 6・8〔我孫子市〕

教育委員会

収蔵文書目録 第五集〔千葉県文書館〕

鎌ヶ谷市史料目録 第一集〔鎌ヶ谷市教育委員会〕

市原市近世文書目録 I・II〔市原市教育委員会〕

朝霞市史調査報告書 第一・五・八集〔朝霞市教育委員会市史編さん室〕

旧幕引継書目録 14〔国立国会図書館図書部〕

東京都公文書館所蔵庁内刊行資料目録 28

芭蕉記念館所蔵資料目録 VII〔江東区芭蕉記念館〕

東京大学史料目録 12〔東京大学百年史編集室〕

豊島区立郷土資料館収蔵資料目録 第六集

東京都公文書館所蔵行政文書目録 学事編

東京大学経済学部所蔵浅田家文書仮目録〔東京大学経済学部図書館文書室〕

外交史料館所蔵外務省記録総目録〔戦前期〕別巻〔外務省外交史料館〕

昭和女子大学図書館所蔵女性文庫目録

本田定弘家所蔵文書目録〔くにたち中央図書館〕

大久保利謙文庫目録〔立教大学図書館〕

新聞記事目録〔東京都 北区〕

田無市行政資料目録平成4年度版〔田無市役所〕

市役所

神奈川県関係新聞記事索引 第31集〔神奈川県立文化資料館〕

藤沢市史資料所在目録稿〔藤沢市文書館〕

神奈川県立文化資料館 第15集〔神奈川県立文化資料館〕

横浜市史料所在目録 第9・11集〔横浜市総務局〕

新聞記事目録 第6集〔平塚市博物館〕

寒川町史資料所在目録 第8集〔寒川町〕

寒川町史新聞記事目録 第5集〔同右〕

羽仁五郎文庫新聞資料目録〔藤沢市総合市民図書館〕

相模原市立図書館郷土資料目録四訂版〔相模原市立図書館〕

相模原市著作者目録〔同右〕

神奈川県立文化資料館県会・参事会文書件名目録

富山県行政資料目録〔富山県総務部文書学事課〕

(富山県) 婦中町歴史文書目録 第1・2輯〔婦中町史編纂委員会〕

環日本海経済交流に関する文献目録 第1・2輯〔富山大学日本海経済研究所〕

泉景文庫目録〔金沢市立図書館〕

中山文庫目録〔同右〕

矢島区有古文書目録〔長野県浅科村教育委員会〕

(長野県) 佐久町役場古文書目録〔佐久町役場総務課〕

松本市立博物館収蔵品目録 文献資料編 1

岐阜県所在史料目録 第31・32集〔岐阜県歴史資料館〕

岐阜県行政文書目録 昭和45・46年度編〔同右〕

岐阜県史料調査報告 第14号〔同右〕

沼津市明治史料館史料目録 13・14

(静岡県) 小山町史資料所在目録 第16・17集〔小山町〕

(静岡県) 春野町史資料所在目録 第4集〔春野町史編さん委員会〕

富士市史資料目録 第4輯〔富士市史編纂委員会〕

静岡県郷土資料総合目録 新版〔静岡県図書館協会〕

知多総研古文書目録 第二集〔日本福祉大学知多半島総合研究所〕

名古屋博物館蔵品目録 第2分冊

一宮市博物館資料目録 (1)

豊橋市民俗資料収蔵室目録〔豊橋市美術博物館〕

蓬左文庫古絵図目録〔名古屋市教育局委員会〕

郷土資料展 1〔豊橋市二川宿本陣資料館〕

三重県史資料調査報告 VIII・別冊〔三重県総務部学事文書課〕

滋賀大学経済学部附属史料館所蔵史料目録 第四十二集  
枚方市史編纂資料目録 第4集(枚方市)

高槻市史資料目録 第十五号(高槻市)  
大阪府行政執行物目録 平成4年度版  
〔大阪府公文書館〕

山澤家文書目録(補遺)〔東大阪市史編纂委員会〕  
教育史資料目録 1~9〔豊中市立教育研究所〕

道修町文書目録―近世編―〔(大阪市)道修町文書保存会〕  
大阪商工会議所関係諸記録〔大阪商工会議所商工図書館〕

神戸市立博物館蔵品目録 考古・歴史の部 7・8、地図の部 7・8、美術の部 7・8  
姫路市史編纂資料目録集 42〔姫路市教育委員会〕

加古川市史編纂資料目録集 11~14・17〔加古川市〕  
淡路文化史料館収蔵史料目録 第八・九集〔洲本市立淡路文化史料館〕

兵庫県新宮町古文書目録集 第七集〔新宮町教育委員会〕  
奈良市古文書調査目録 (一)・(三)・(六)・(九)〔奈良市教育委員会文化財課〕

加古川市史編纂資料目録集 近現代編 1・2

黒川古文化研究所収蔵品目録 第20・21資料調査報告書 第二十集(鳥取県立博物館)

改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録 藩士2~4〔岡山大学附属図書館〕  
山口県文書館収蔵文書目録

行政資料目録〔岡山県〕〔同右〕  
追録1~7〔同右〕

広島市公文書館所蔵資料目録 第15・16集  
広島市行政資料目録市政資料編 昭和61年3月〔同右〕

〔同右〕追録1~7〔同右〕  
行政資料目録 平成3年3月31日現在

〔広島県総務部県民情報室〕  
武田家所蔵史料目録〔(徳島県)脇町文化史研究所〕

行政資料目録 追録2〔(愛媛県)総務部学事文書課(行政資料室)〕  
高知県立図書館蔵郷土資料増加目録 平成4年度

福岡県立図書館収集文書目録 第二・三輯  
大阪府立中之島・夕陽丘図書館増加図書目録 平成3年度

柏屋町誌編纂資料目録 第1次~第3次追加分〔(福岡県)柏屋町誌編纂室〕  
上妻文書目録〔(福岡県)立図書館〕

八女市立図書館所蔵絵図類目録〔同右〕  
資料目録(改訂版)〔(福岡県)企画振興部調査統計課〕

〔同右〕(追録1・2)〔同右〕  
行政資料目録〔(福岡県)総務部県政情報課〕

飯塚市歴史資料館収蔵資料目録 考古資料編・歴史民俗美術石炭資料編  
喜多村家寄贈資料目録(久留米市教育委員会)

森田家寄贈資料目録〔同右〕  
鹿兒島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録

橋本佐輔家文書目録〔(富山県)中島町教育委員会〕  
静岡県周智郡春野町所在文書目録 I・IV〔(國學院)大学地方史研究会〕

加古川市史編纂資料目録集 15・16  
日本外交文書昭和期国際連盟経済関係会議報告集 第1卷(外務省)

北海道開拓記念館研究報告 第13号  
弘前藩の刊法典 (十五)〔橋本久〕  
青森県立郷土館調査報告 第32集

千既町史 第三卷(岩手県)千既町  
鹿角市史資料編 第二十五集(鹿角市)  
山形市史資料 第80号(山形市)

新庄市史編纂資料集 第十七・二十一号〔(新庄市)教育委員会〕  
滝根町史資料集 第21集(福島県)滝根町教育委員会

滝根町史資料叢書 第五集〔同右〕  
第5回歴史の華ひらく泉南シンポジウム(泉南市教育委員会)

桑折町史叢書 第一集第八分冊・第九分冊(福島県)桑折町史編纂委員会  
龍ヶ崎市史 中世史料編・民俗編(龍ヶ崎市教育委員会)

猿島町史資料編(茨城県猿島町)  
日立製作所と地域社会 I〔(日立市)郷土博物館〕  
茨城県指定史跡土浦城址内土浦城西櫓復元工事報告書(土浦市)

南河内町史 資料編1・3〔(栃木県)南河内町〕  
館林双書 第21卷(館林市立図書館)  
所沢市史調査資料 33〔(所沢市)史編さん室〕

八潮市史調査報告書 11〔(八潮市)上尾市史編さん調査報告書 第6集(上尾市教育委員会)〕  
都幾川村史資料 4(1)・(2)〔(埼玉県)都幾川村〕

玉泉(茂原市立図書館) 第1集〔(茂原市)立図書館〕  
埼玉県人間東部地区歴史の道(人間東部地区文化財保護連絡協議会)

中世石造遺物調査概報 (1)〔(埼玉県)立歴史資料館〕  
歴史の道調査報告書 第16集〔同右〕

君津市史 史料集Ⅲ・Ⅴ〔(君津市)鎌ヶ谷市郷土資料館調査報告書 Ⅲ(鎌ヶ谷市郷土資料館)〕  
北総の古刹大慈恩寺の宝物(成田山靈光

院)  
袖ヶ浦市文化財要覧(袖ヶ浦市教育委員  
会)

船橋市立場遺跡発掘調査報告書(船橋市  
教育委員会)

郷土資料館資料シリーズ 第32号(八王  
子市郷土資料館)

日野市史料集 高幡不動胎内文書(日  
野市史編さん委員会)

五十子敬育日記 昭和2年・昭和3年・  
昭和4年(同右)

西南北三多摩境城変更通覧(東京都)

豊島区立郷土資料館調査報告書 第9・  
10集

民権ブックス 6(町田市立自由民権資  
料館)

かつしかブックレット 1~3(葛飾区  
郷土と天文の博物館)

世田谷区遺跡調査報告 12(世田谷区教  
育委員会)

大田区の文化財 第29集(大田区教育委  
員会)

大田区の埋蔵文化財 第13集(同右)

江戸川区文化財調査報告書 第八集(江  
戸川区教育委員会)

江戸川ブックレット No.10(同右)

杉並資料集録 杉並近世絵図(杉並区教  
育委員会)

平成元年度・平成二年度杉並区の指定登  
録文化財(同右)

杉並区の指定登録文化財(同右)  
大田区古墳ガイドブック(大田区郷土博  
物館)

大田区海苔物語(同右)  
ガイドブック セーラムの歴史(同右)

かつしかの道総合調査報告書(葛飾区教  
育委員会)

東京東郊の生産伝承 Ⅲ(葛飾区郷土と  
天文の博物館)

町田市小野路地区文化財調査報告 (下)

〔東京都教育庁文化課〕  
広福寺台遺跡 Ⅱ(昭島市教育委員会)

昭島市内の指定文化財 改訂版(同右)

滝ノ上遺跡(同右)

モース博士と大森貝塚 大森貝塚ガイド  
ブック(品川区立品川歴史館)

初台遺跡 1993(日本芸術文化振興  
会・渋谷区初台遺跡調査団)

横浜市史 Ⅱ 第一巻上(横浜市)

〔同右〕資料編3・4(上)(同右)

大和市史資料叢書 4(大和市庶務課)

横浜近代史研究会報告(横浜開港資料館)  
史料でたどる明治維新期の横浜英仏駐屯  
軍(同右)

横浜市文化財総合調査報告書 第二十二  
輯の一(横浜市教育委員会)

横浜市文化財総合調査概報(十)(同右)  
横浜の文化財 第二集(同右)  
金井町文化財調査報告 第9集(新潟  
県) 金井町教育委員会)

荒川郷土史(富山県) 荒川郷土史編集  
委員会)

常西合口百年史(富山県) 常西用水土  
地改良区)

常西合口用水概要(同右)

弓庄山明光寺史(明光寺)

環日本海経済交流に関する調査・研究  
〔富山大学日本海経済研究所〕

福井市立郷土歴史博物館史料叢書 八

真田宝物館図録(長野市教育委員会)

葦山町史 第七・九巻(静岡県) 葦山  
町史刊行委員会)

金谷町史 資料編二(静岡県) 金谷町)

沼津市史叢書 一(沼津市教育委員会)

図書館叢書 3(浜松市立中央図書館)

沼津市史編さん調査報告書 第三集(沼  
津市教育委員会)

新居ものがたり歴史100選(静岡県)  
新居町教育委員会)

南ノ原遺跡(静岡県) 小山町教育委員  
会)

瀬戸市近世文書集 第四集(瀬戸市)

豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第15・17  
集(豊橋市教育委員会)

平成六年度史料管理学研修会(第四〇  
回)の開催

本年度の長期研修課程は、前期が平成  
六年七月四日~七月二十九日、後期が平成  
六年八月二十九日~九月二十二日の日程で、  
東京会場(国文学研究資料館)にて開催  
された。短期研修課程は、平成六年一  
月七日~一月十九日の日程で、新潟会  
場(新潟会館)において開催される(受  
講者は決定済み)。研修内容及びカリキ  
ュラムは前号(六〇号)を参照のこと。

○国文学研究資料館夏期公開講演会  
(第一七回)

「幕末から明治へ」を共通論題として  
七月二十八日~二十九日に開催され、その一  
つとして史料館長森安彦が「幕末維新期  
庶民の識字力の展開―寺子屋・郷学・学  
制分布―」のテーマで講演した。

○原典講読セミナー(第二回)

本年八月二日~二六日の五日間開催  
され、史料館教授丑木幸男が「豪農のみ  
た一九世紀欧米社会」のテーマで三コマ  
を担当した。

○評議員会と運営協議会の開催

平成六年六月二二日に運営協議会、  
同年七月二〇日に評議員会がそれぞれ開  
催され、名誉教授の選考、管理運営、次

地方史文獻公開範囲の拡大

今年四月より史料館では、地方史文獻の公開範囲を拡大致しました。

これまで史料館では収集している図書のうち目録類を昭和五十七年十月から、地方史文獻の一部(県郡史)を昭和五十八年四月から公開致しておりましたが、このたび(平成六年四月より)地方史文獻の公開範囲を拡大し、史料館で地方史として分類整理しております文獻のほとんどを公開致す事となりました。地方史文獻の主なもの、既に公開している目録(A)、県史(B)、郡史(C)の他、市(特別)区史(D)、町村史(E)、叢書(F)、資(史)料集(G)、諸史(J)、研究書・事典(K)、民俗・文化財報告書(L)、地図(M)などです。

これらの文獻は、「仮目録」として分類目録カードの複写(冊子体)を閲覧室に備えましたので、その目録で閲覧請求ができます。

これら地方史文獻の目録はいずれも公開する予定で準備作業を進めております。それまでは、不十分ではありますが、この「仮目録」でご利用ください。

なお、雑誌類についても来年度公開に向けて現在準備作業中です。

年度事業計画等について、協議ないし評議された。

○評議員の新任(敬称略)

新任(本年七月一日)

石井進(国立歴史民俗博物館長)

○運営協議員の退任と新任(敬称略)

退任(本年六月三〇日)

石井進(同前)

新任(本年四月一日)

高木俊輔(史料館教授)

同(本年八月一日)

吉原健一郎(成城大学教授)

○私学研修員の受入

学習院女子短期大学教授

松尾美恵子氏

期間は平成六年四月一日から同七年三月三十一日まで。研究課題「幕藩関係文書

の研究―その生成、記録、保存、利用をめぐって―」

○内地研究員の受入

日本学術振興会特別研究員

富善 一敏氏

期間は平成六年四月一日から同八年三月三十一日まで。研究課題「近世・近代期の地域社会と村落行政―文書管理史の視点から―」

○館内研究会

〔二九回〕平成六年六月二日

史料管理学プログラムの設計

鈴江英一

○研究交流

本年六月一日、新潟大学客員研究員として来日中のオハイオ州立大学歴史学科準教授フィリップ・C・ブラウン氏に、米国における日本史研究の現状についてお話しいただき、交流を深めた。

○文部省科学研究費補助金の交付

・研究成果公開促進費「史料所在データベース」(代表森安彦)に、一、〇八七万円が交付された。

・一般研究C「民間所蔵史料の保存・管理に関する研究―山梨県大月市星野家文書を素材にして―」(代表安藤正人)に六〇万円が交付された。

・奨励研究A「寛文・延宝期における幕政史並びに藩政史の構造的連関性についての基礎的研究」(代表福田千鶴)に九〇万円が交付された。

・特別研究員奨励費「近世・近代期の地域社会と村落行政―文書管理史の視点から―」(代表富善一敏)に八〇万円が交付された。

○出版物の刊行

「古文書が語る近世村人の一生」(森安彦著、セミナー「原典を読む」4)を平成六年八月に平凡社より刊行した。

○人事異動

・転入(平成六年四月一日付)

高木俊輔 教授

(信州大学人文学部教授から)

併任(平成六年四月一日付)

情報閲覧室長(教授・第二史料室長 併任)

鈴木英一

採用(平成六年客員教授)

史料管理研究室 客員教授

馬淵久夫

新任

事務補佐員

島山典子

平成七年度史料管理学研修会(通算四一回)の開催予定

長期研修課程

国文学研究資料館 東京会場

前期 七月三日～七月二十八日

後期 七月九日～九月二十九日

短期研修課程

広島県広島市 会場未定

七年十一月六日～十一月十七日

(前・後期、短期とも最後の一週間

はレポートの作成にあてる)

史料館報 第六一号

平成六年(一九九四)九月三十日

編集兼 国文学研究資料館

発行者 史料館

〒四〇〇 東京都品川区豊町一ノ六ノ一〇

電話〇三(三七八)七二二(代)

FAX〇三(三七八)七〇五二

〒一六〇 東京都中野区中央四ノ八ノ九

株式会社 三協社

電話〇三(三三三)七二八一